

学校法人滋慶学園
常務理事
平田豪成



人材育成において最も大切なのは 意欲をいかに喚起させるかということ

与

えられた問いに正解をだすことに長けた若者は大勢います。高度成長期であれば、それも社会では通用しました。周囲の成功例を手際よく真似すれば、2、3番手、いや10番手くらいでも食べていくことはできました。しかし、20年のデフレ低成長期を経て、そうしたやり方もはや通用しないことは明らかです。仕組みを変え、新たな物を生みだすことが求められるインベシジョンやクリエイションの時代、必要なのは、答えをだす力ではなく、「問う力」です。「自問自答する力」「対話する力」といってもいいでしょう。キャリア教育の重要性が叫ばれていますが、私はキャリア教育で最も大切なのは、この「問う力」だと思っています。

そうした力を滋慶学園では、これまで専門学校を中心に育んできましたが、われわれ流のキャリア教育をもっと早い段階からスタートさせる場として、2011年秋に開設したのが「ゆうゆう保育園」です。幼い時期から「仕事」と触れあい、大人と「対話」する場を作ろうと、事務室や職員室をガラス張りにし、調理室の様子もよくわかるようにしました。今後は、グループの強みを生かし、各専門学校と連携した職業体験的なコンテンツを導入していきたいと思っています。

そこで働く保育士には、一人ひとり違う子どもたちを前に、直感力と現場力をもつて対応してほしいと思います。そのためには「経験」を積むことです。「体

験」したことをすぐに言葉に置き換え、自らの「経験」とするのは、体験を自分の言葉でふりかえり、言語化することで内面的な記憶へとしっかりと定着させる。そうした自問自答や対話によって理解は螺旋的に深まっていくことでしょう。滋慶学園グループはこれを、(LT)→教育システム(LOOK→TRY→LISTEN→THINK)として長く実践してきました。

人材育成において最も大切なのは、学ぶ人の意欲をいかに喚起させるかです。「教える」ということは、本来個人の外側にある知識や技能を内側へ押し込むことです。単に「覚えろ！」では、うまくいきません。個人の内側に定着させるには、学ぶ側の「学びたい」という意欲が不可欠であり、教える側にはそのためだけの仕掛けや手助けが必要になります。

本学園は早い段階から教育システムにカウンセリングの要素を取り込みました。意欲をもつて学んだ学生は、自分たちが保育士や幼稚園教諭として子どもたちに向き合うとき、相手がもつ力を上手に引き出したり、求めに応じてうまく対話ができたりするはず。一方的な指導では人は動きません。それはどんな世界でも同じです。

【常務理事プロフィール】ひらた・ひであき●1948年生まれ。医薬品業界誌の編集を経て、映画プロダクション「シネマ・ネサンス」の創立に参加。83年、滋慶学園東京医薬専門学校に入職。東京福祉専門学校を皮切りに医療・福祉・スポーツ・美容・製菓・調理等の専門学校18校を新規開校、再建した。89年より現職。

【学校法人プロフィール】1976年創立。医療・福祉・保育・健康・スポーツ・動物・海洋・環境・フラワー、テクノロジー・バイオ、製菓・調理、クリエイティブ・デザイン、映画・映像、音楽・ダンス・アクター、美容、ホテル・観光・語学の10分野25の教育領域で多数の専門学校を運営。